

時間と空間からみた巡礼の世界

ジャン・シェリーニ
(訳：尾崎俊輔)

アンリ・ブラントム氏との共編著のうち最初の二冊——『神に至る道—キリスト教巡礼の歴史、始まりから現代まで』『非キリスト教巡礼—魔術と聖なるものとのあいだ、神々に至る道』ⁱ——で明確となった問題関心にうながされ、私たちはひき続き巡礼について探求と思索を進めてきたのですが、そこで目指したのは、時間と空間を横切ってあらゆる巡礼の類似点と相違点を取りだそうという、より総合的な試みでした。まず、共通点については一目瞭然で、巡礼者たちが旅立つ際の動機、支度、衣服、誓い、そして、移手段、聖地にたいする態度、残された奉納物、持ち帰るための土産物といったものがあります。エクス・ヴォト(聖者への捧げ物)はすべての巡礼地においてみられ、巡礼者はだれもが、聖域に触れて聖化されたなんらかの物を持ち帰ります。そうするのも、到着したときにそれらを親しい人たちに贈り、神聖なものとなったその旅のご利益を彼らと分かち合うためだからです。また、多くの国で巡礼者により信心会や、同じ聖地より戻ってきた者たちからなる団体が組織されたりしています。このように、際立った類似点がいくつもみられ、研究者の関心もひいているのですが、それらは世界中の巡礼のあいだにある真の類似性を示すにはいまだ不十分なものととどまっています。それゆえ私たちは、これまでの研究で扱った題材を細部にわたってふたたび取りあげ、調査をさらに続けなければなりません。その過程で数多くの困難にぶつかりましたが、それというもこのテーマに関する文献がまれにしかなく、あったとしても分散しており、とりわけ、レベルに大きなばらつきがあったからなのです。

研究材料としては、上の二冊の研究およびその後の研究をすすめるなかで、新しいものを手にすることができました。たとえば、マルセイユのノートルダム・ド・ラ・ギャルド大聖堂やヴァール県のサント＝ボームなど、いくつかの聖地で巡礼者自身によって書きこまれた記録簿や、パリのブランシュ広場界隈にあるサント＝リタ教会の掲示板や隅々に残されたメッセージといったものです。またルルドへの巡礼者たち、なかでも若者を対象におこなった調査では彼らの動機について明確なデータを得ることができました。さらに、シトー会修道士ギヨーム・ド・ディギュルヴィルが14世紀に書いた『人生という巡礼』ⁱⁱ から、フランスでは1996年『星の巡礼者』ⁱⁱⁱ というタイトルで刊行されたブラジル人作家パウロ・コエリョの著作まで、巡礼について重要と思われる典拠を文学においても探しました。

巡礼の足跡を見つけるため、私たちは先史時代も含みあらゆる時代を調査したわけですが、書かれた史料にくわえ、エジプト、古代ギリシャ、ローマ帝国におけるさまざまな巡礼については、考古学が貴重な情報を提供してくれました。史料のなかでも内容がもっとも豊かなのはユダヤ教、イスラム教、とりわけキリスト教など一神教によるものでしたが、私たちの好奇心はそれらにとどまらず、コロンブス以前のアメリカから極東まですべての大陸におよびました。

私たちの比較研究が長らくかかざらってきたのは、あらゆる時代と宗教における巡礼者、人間の類型としての巡礼をおこなう人間、また彼らの動機や内なる対話といったことでしたが、道のり、移手段、途上での宿泊地や休憩所、旅行者たちを迎える巡礼宿のネットワークにも同時に関心を払ってきました。巡礼者といっても全員がまっすぐな道をたどるわけではありません。なかには円環状の道のりをたどる者や、錯綜した道のりに入りこんでいく者、タマビキ貝の殻のように巻いたりひらいたりする道をとる者など^{iv}、その道

のりはさまざまです。ロシアのユロージビー（佯狂行者）のように、神秘的な彷徨のなかに身をおき、ひとつ巡礼が終わるとまた次を始めるという具合に、決して巡礼をやめることなく続ける者もいます。またジャイナ教徒は、完全なる解脱をあらわすため「空間」を身にまとい、つまり全裸で巡礼の道を倦むことなく走りとおすのです…。

しかしながらたいの巡礼者は、神性や聖性があらわれたか跡をのこした場所へむかうという目標をたてて歩を進めます。大聖堂から小さな礼拝堂まで、巨石から聖なる泉まで、トーテムから祝福をうけた木まで、聖地や聖域はきわめて多様性に富んでいます。この多様性に匹敵するのは、努力の末ついに到着した巡礼者が歓喜、敬虔、崇拜の念を惜しげなくあらすときにみせる表現行為の類似性だけなのです。たとえばルルドでは、信徒は行列に加わり、病人は奇跡の水に身を浸します。メッカでも同じように、巡礼者はカーバ神殿のまわりを回り、ザムザムの聖なる泉の水で身を清めます。

時間の上ではわずかにずれをとめないながらも、ことなる二つの崇拜において、同じ聖地や人物を目指して巡礼が同時におこなわれることがあります。たとえばハイチ人は、聖ヤコブと戦いの霊オグ・バランジョ Ogou Balindjo に祈りをささげるためにプレーヌ＝デュ＝ノールへ足を運び、翌日は聖アンナと母なる大地の霊グランド・バタラー Grande Batalah に祈りをささげるためリモナードを訪れます。カトリックの掟を守りつつヴードゥーにも忠実である彼らは、このようにしてみずからの企てが成功するよう、二重の保証をあたえているのです。キリスト教徒とイスラム教徒にしても、小アジアの洞窟とブルターニュのヴェー＝マルシュで、ルイ・マンニョンが類似しているとしたエフェソスの7人の眠れる男を崇拜してはいないでしょうか？

徒歩と移動が巡礼のもっとも主要な構成要素であるとして一般にみられているならば、状況によって信徒は巡礼の内面化を強いられることもありえます。たとえば、14世紀から15世紀への転換期、感情や意志などをあからさまに表へ出すことをきらい厳格な霊性を重んじた一派「デウォティオ・モデルナ（新しい信心）」によって精神的な巡礼がおしすすめられました。この巡礼は、祈りためのいくつかの段階をへながらおこなわれるのですが、それぞれの段階は瞑想がさしはさまれ、そのため多少長く続くものでした。そのように動きのない神秘的な方法で、巡礼の究極の段階である神との合一という至福へいたることができるとされたのです。

生者からしかるべき追悼の辞を受けなかったならば死者もまた、古代ローマのレムレス（死者の霊）のように、長い旅路につくことになるかもしれません。もっとも、このような巡礼者というのはあまりすすめられるものではないのですが。文化によっては、死後の巡礼の道筋がすべて描かれている場合もあります。たとえばエジプト人は死者の書に記された指示に従いさえすればよく、チベット人はバルド（チベット死者の書）の指示に従いさえすればよいのです。もちろん彼ら死者たちにとって巡礼から生者の世界への帰り道はありません。

巡礼者とともに、さまざまな言葉、祈り、歌、思想、技術、芸術様式もめぐり伝わるのですが、それは彼らが祈り、歌い、対話するからなのです。宿泊地では議論がかわされ、おのおの他人の習慣やしきたり、好みについて、また木材や鉄、金を加工するときの技法、絵や彫刻の技術といったことを知り身につけます。エミール・マールがあきらかにしているように、中世のフランス芸術は、型、技法とともに巡礼の道を通ってイタリアに広まっていったのです。

建造物の建設、建築術にとっても巡礼は特別で絶えることのない原動力となってきました。近代と同じく古代、中世においても、またイスラム教の地域と同じくキリスト教の国々においても、巡礼者が訪れる場所には寺院、聖堂、巡礼宿、宿泊所、病院、墓地がたち現れました。地理的によりかぎられているユダヤ教ではとくにエルサレムが巡礼地であり続けていますが、そのほかの記憶の場所も多くの人々をひきつけていま

す。たとえばヘブロンは、アブラハムならびに族長たちの墓を拝むためユダヤ教徒とイスラム教徒が訪れる場所です。かくも多くのユダヤ人が命を落とした、アウシュヴィッツをはじめとするショアーにまつわる数々の場所は、ユダヤ人共同体にとって、またジェノサイドの記憶をとどめておきたいと願うすべての者にとって巡礼地となっています。それらの場所にはヨハネ・パウロ2世もいく度も足を運んでいます。

100をこえる教皇の巡礼は、ヨハネ・パウロ2世の教皇としての側面のうち、もっとも特徴的なもののひとつをなしています。ペテロとパウロの墓詣でをかねた、教皇という一人の生者への巡礼は、聖年および近年始められた世界青年の日には訪問者の数がピークをむかえ、多くの人々をローマにひきつけてやみません。また逆にヨハネ・パウロ2世は、彼に会いに来ることができない人たちのもとへも巡礼に出かけます。彼は教皇として旅にでるごとにマリア聖地へ巡礼をおこないますが、そのさいヨハネ・パウロ2世は、彼のもとへ巡礼に来る信徒たちのように民衆や人々のそばについて巡礼におもむきます。現代ではこのような生者への巡礼を、よりひかえめに言っても二人の聖痕を授かった者——ドローム県シャトーヌフ・ド・ガロールのマルト・ロバンと、サン・ジョヴァンニ・ロトンドのピオ・デ・ペトラルチーノ神父——への巡礼をあげることができます。

さて、以上に述べた、時間においても空間においてもさまざまなこれらの巡礼から類似性や一致する特徴を引き出すことはできるのでしょうか？神をめざして歩く者たちすべてのあいだに、世界の道々へと身を投じる原初的なひとつの動機が存在するのでしょうか？はたして巡礼者であるというのは人間の運命なのでしょうか？

調査を進めるうちにひとつのことが確認されるようになりました。それは、巡礼がすべての文明にみられる普遍的な行為であるという事実です。キリスト教巡礼および非キリスト教巡礼に関する上の二つの研究であきらかとなったのは、この普遍性と同時に巡礼にまつわる諸事実および諸特徴のつきることのない多様性でした。逆に、可能なかぎり体系的にすすめた、最近刊行されたばかりの私たちの比較研究——『世界の巡礼』——が示しているのは、時代、文化圏、精霊崇拜や農業信仰も含むあらゆる宗教をまたいで相似性が差異を凌駕しているということです。巡礼という行為にあって、シンボルや巡礼のすすめかたが似通っているという事実は、世界のさまざまな文化の壮大な叙事詩的物語や詩が描く類似性をいやがおうでも想起させるものなのです。

多様な宗教における巡礼の物的側面のあいだに多くみられる一致はあまりに自明で、それについて長々と述べることはしませんでした。巡礼者たち自身のあいだにある独特な一致点には注意を払いました。巡礼は精神の道筋が物的なあらわれとなって作用するもので、内面的に巡礼者はみな似通っています。彼らは、それまでの人生とたもとを分かち新たな人生の扉をひらく、特別な道のりへと足を踏みだすのです。巡礼者は肉体的にも精神的にも完全に身を投げだし、日常生活を埋めつくしているあまたの関心事をみずからの人格から取り除きながら、唯一の目的にその存在を集中させるのです。そうすることで身軽になり、清められ、道のりの最後に待ちうけている出会いにむけて張りつめた状態にいるのです。巡礼者には、光であり力である他者と会う約束があり、それ以外のことはすべて二の次となります。真の巡礼者とはこの約束が果たされることを確信し、その確信のうちにくらす者であり、それを待ち望むことを動機とする者をさしているのです。聖地でのよろこびは払った努力に見合うものとなります。巡礼者はそれぞれ、体と心のうちに生涯忘れることがないであろう崇高な高揚感を覚え、なかにはみずからのうちにあるその幸福のそとにでるのを厭い、その場で死のうとする者もいるほどです。「真の巡礼」には行きがあるのみで帰りはしないのではないのでしょうか？巡礼の道の行きつく先にある死と不死。チュニジアのケルアンやインドのベナレスはこうした究極の巡礼者たちを迎え入れています。エルサレムも、三大一神教の信者たちにとって絶対的信仰を喚起する場所となっており、城壁の下にはユダヤ教とイスラム教の巡礼者が埋葬されたキドロンの谷がひろがっています。

聖伝ではここがヨシャファトの谷とされており、預言者ヨエルによればこの谷で最後の日に死者たちが復活するのです。

巡礼者たちがみな死ぬわけではもちろんありませんが、それでもみな帰途につくことに危惧の念をいだきます。彼らはそれに面と向き合わなければならず、ここが巡礼のうちでもっともむずかしい段階なのです。モチベーションはおおいに下がっており、巡礼者の多くはできるだけ早く戻るために手を抜こうとします。彼らはしかし、ふたたび平凡さのなかで日々のもろもろの制約と出会うことをおそれているのです。けれども巡礼者は、家族と共同体に報告をおこない証言する義務を負っており、持ち帰った土産、授かった精神的な恩恵、聖地で遭遇した心底からの信念を彼らと分かち合わなければなりません。巡礼という伝統が、巡礼を果たした者たちが共有する豊かさによってつちかわれていることはあきらかです。こうした見方からすると、巡礼というのは布教であり、証言であり、勧告なのです。巡礼に行ってきたことは戻ってきた巡礼者にとってひとつの証、ひとつの聖別であり、肩書きをもったり、名前を変えたり、あだ名をつけられたりするほどのものなのです⁴⁾。とはいうものの、ますます簡単に旅行ができ、ヨーロッパでは聖地が近場で魅力的な巡礼地を提供してくれる今日、巡礼は、ときには年に一度のペースで繰り返しおこなわれ、それによって巡礼者がみずからのふるまいの意味を深めようとする精神の定期的反復運動とでもいうべきものとなり、その例外性は失われつつあるのですが。

一回であれ繰り返されるものであれ、巡礼は「探求」であり、神性のあらわれや聖なる痕跡をとどめる場所への歩みであり続けています。巡礼者という言葉——ラテン語でペレグリンヌス *peregrinus*——は、通り過ぎる者とよそ者の両方を意味し、イスラム教のハッジは「～へむかう」という意味であり、日本の遍路は「歩み」「～へ行く」という意味です。聖なる目的地へむけていつものすみかを離れる、人間という主体が存在しない巡礼というものはありません。「行く」というこの運動は、俗世間にある家という通常の場合と、特別で神聖な巡礼の目的地である聖地とを対置させます。また、巡礼にとって道は出発というよりそれ自体で目的としての性格をもち、特別で神聖かつ儀礼化されたものなのです。巡礼者は到着すると、「まわりを回る」という意味の言葉をよくもちいます。松明をともしたルルドの見事な行列でも、「～へ行く」と「らせん状に回る」という二つの側面が組み合わされています。すべての場合において歩みは聖地へとむけられているのです。おそらく、西欧キリスト教では「～への歩み」という動態によりアクセントがおかれませんが、世界の多くの宗教では到着地、つまり聖地に重きをおくほうが好まれています。さらに、ルルドやローマはサン＝ピエトロ寺院の境内、メッカのそれといったように多くの場合、聖地をとり囲んでいるのは建築学的な地取りです。そこでの「行列」はいわばミニチュア巡礼と同一のものとされているのです。

宗教的なおこないにみえるという点で、当局が治安、精神の純粹さ、イデオロギー上の敵意といった理由から巡礼を禁じたとき、その実践は衰退するか姿を消さなくてはならないでしょう。宗教改革で転向した国々、なかでもマリア信仰の痕跡や聖人崇拝が残っていないカルヴァン主義の伝統をもつ国々では巡礼がとだえてしまいました。それでも記憶の場所は残り、そこには決められた日に人々が集まっているのです。フランスであればセヴェンヌの荒野、つまりルイ14世下でのプロテスタントの迫害と、国王軍への抵抗に関する博物館があるルニマニスベイランがそれにあたります⁵⁾。ジュネーヴには宗教改革の記念碑があり、ドイツ、スカンジナビアなどほかの場所にも、巡礼に訪れる数多くの者を迎える記念の場所があります。たとえば、1521年にルターがザクセン選帝侯フリードリヒの庇護のもとにかくまわれたヴァルトブルグ城、とりわけ彼がくらし、聖書をドイツ語に訳した部屋などがそれです。啓蒙君主たち、また彼らのあとにはナポレオンは「一日をこえる巡礼」を禁止し、時間と金銭が無駄に使われることを告発していますが、1815年以降ヨーロッパでは巡礼は徐々にいきおいを取り戻し、1850年からはかなり盛んにおこなわれるようになります。

反宗教的かつ無神論的であるがゆえにより急進的な共産主義体制は、巡礼ならびにほとんどの精神活動を

厳しく禁止していました。ソヴィエト連邦では移動するさい国内パスポートを提示しなければならず、そのため信徒はいにしえの巡礼地へおもむくことができませんでした。もし行けたとしても巡礼地の多くは閉鎖されていたか壊されていたのですが。信者は自分の家でひそかに聖なるイコンを崇拜し続けていたのです。共産主義当局は聖遺物の観念をねじまげ、そのかわりとしてレーニンや毛沢東といった防腐処理をほどこされた創設の英雄のなきがらや、党の重要人物の墓を表敬訪問する権利を大衆にあたえたのでした。ソヴィエト帝国および共産主義体制が崩壊したことで、それらにせの聖地からは正当性がうばわれ、さまざまな形態の民衆信仰が権利を取り戻しました。共産主義の支配下におかれていたポーランドでは政権が巡礼をやめさせることはできず、チェンストホーヴェにあるヤスナ・グラの黒い聖母にはますます多くの人々が訪れていました。クロアチアやスロヴェニアといったカトリックを伝統にもつ旧共産主義国や、ハンガリーのカトリック地区でも同じことがいえます。また、ルーマニア、ブルガリア、ロシアなどのギリシャ正教の国々でも伝統的な巡礼がふたたび盛り上がりを見せています。

このように、巡礼という現象は根底からよみがえっているわけなのですが、この現象は宗教以外にも領域を広げています。フランス左派のリーダーたちは毎年、1871年パリ・コミューンの最後の兵士たちが銃殺されたパール＝ラシェーズ墓地にある連盟兵の壁の前へ黙祷をささげに行きます。また、ミッテランは毎年ロッシュ・ド・ソリュトレへ足を運び、一種の巡礼をつくりだしていましたが、それは男性仲間からなる緊密なサークルへの入会儀礼と、大統領の熱烈な支持者たちへ送られる、メディアをつうじた身振りと神秘的なサインを合わせもつ性格のものでした。しかしこの巡礼は、それをつくりだした本人よりも長続きするのでしょうか？より国レベルで市民的なものとしては、エトワール広場の凱旋門、慰霊碑、戦死者墓地への公式訪問ならびに非公式訪問といった市民の巡礼があります。参加者たちは死んでいった英雄たちを思い出し、傷ついた祖国を崇拜することで同じ感情を分かち合うのです。ユゴーの言葉にあるように、「忠誠をつくして祖国のために命を落とした者たちには、その棺のもとに人々が訪れ祈りをささげる権利がある」のです。

信仰に殉じた者と同じく自由に殉じた者もまた、記憶による承認と崇拜を求めています。ヴァレリアンの丘、凱旋門の下、アウシュヴィッツの構内における彼らへの崇拜は行列と巡礼というかたちをとり、それらの場所には宗教旗、鐘、聖職者による詩篇朗唱にかわってさまざまな旗がおかれています。

巡礼はありとあらゆる文化にみられる普遍的なものです。巡礼がひろくおこなわれている文明では巡礼にその文明特有の側面と独自性がみられますが、それらが人間としての性格や感情を変えることはありません。巡礼がたんなるひとつの文化現象でないとすればそれは、巡礼が人間の心にきざみこまれ、根源的な性質のうちに含まれているからなのです。もしかすると、巡礼の遺伝子をヒトゲノムのなかに探さなくてはならないのでしょうか？いや、人間の本質が自発的、普遍的にあらわれたものと巡礼をとらえるほうがよりシンプルなのではないでしょうか？

時代と大陸にまたがって普遍的に巡礼がみられること、多くの人々が本能的、自発的に巡礼を求めていることが、巡礼という行為がすべての者に認められ歓迎されていることを意味するものではありません。1993年ロカマドゥールで開かれたシンポジウムの結びにおいて確認されたのは次のようなことでした。さまざまな史料（詩、文学、巡礼者による物語、図像）からみて、中世におけるキリスト教巡礼は全体的に、15世紀には批判のほうがより多かったにせよ肯定的、好意的なイメージがあたえられていました。一方、宗教改革と啓蒙思想は巡礼行為を迷信じみて金銭的にもよからぬものとしてはげしく異を唱えたのでした。カルヴァンの目には、国内の宗教と労働に従ずることほうがよりキリスト教的で共同体に有用な行為と映ったのです。フィロゾーフたちは巡礼をほかのあらゆる形態の民衆信仰とひとまとめにして一掃しました。より最近の例でいえば、セネガルのムーリッド教団の設立者で初代カリフのアマドゥ・バンバ Amadou Bamba が、信徒のために瞑想と祈りを農作業に替え、それを宗教行為としました。同様に、遠く離れたメッカへの巡礼を、トゥ

バのちかくに彼が建てた大モスクへの毎年の巡礼に替えたのです。

巡礼は、それを枠にはめ監視しようとする政治権力および宗教権力の側に少なからず不信感をまねいてきましたし、今なおまねいています。これについては、17、18世紀ヨーロッパで巡礼期間が司教によってむりやり制限されたことや、より私たちに身近な例として、まだ聖性を認められていなかった存命中のピオ神父のもとへむかう巡礼者たちの移動が長らく制約されていたことなどが思い起こされます。しかし、これらの制限と束縛が、多くの巡礼者の熱意をそいだことは決してありませんでした。巡礼への願望、恩恵が得られることへの期待、道のりの途中および聖地へ到着したときに見いだす幸福感、これらのことを巡礼者があまりに強く感じるため、実現する上で障害となるものを押しのけるのです。巡礼は、精神がふたたびかたちをとり、存在の根源へ回帰するものとして、また、利己的で所有欲にまみれた自分自身を徐々に無にし、この世の瑣末な出来事から放たれるものとして体験されます。それは肉体と、最良の場合には魂の平静を得るため、そして果てしない超越性へと心を開くためにおこなわれるものなのです。

*本稿は、今回のシンポジウムでおこなわれたシェリーニ氏による講演の概略である。

- i) Jean Chélini et Henry Branthomme, *Les Chemins de Dieu, histoire des pèlerinages chrétiens des origines à nos jours et Histoire des pèlerinages non chrétiens. Entre magique et sacré : le chemin des dieux*. それぞれ1982年と1987年、ともに Hachette Littératures 社からの出版。のち、二冊とも同社の Pluriel シリーズに収められた。
- ii) Guillaume de Digulleville, *Le Pèlerinage de vie humaine*, adapté et commenté par Paule Amblard, Flammarion, 1998.
- iii) 1987年ブラジルにおいてポルトガル語で出版された。原題は *O Diário de um Mago*. パウロ・コエーリョ (山川紘矢、山川亜希子訳) 『星の巡礼』地湧社、1995年。
- iv) コルシカのカルヴィ、エルバルンガで聖週間におこなわれるグラニトーラの行列がこれにあたる。グラニトーラとはコルシカ語でタマビキ貝をさす。
- v) Jean Chélini et Henry Branthomme, *Les pèlerinages dans le monde*, Hachette Littératures, 2004.
- vi) 巡礼という行為が長旅から帰った巡礼者にどれほど刻印をのこすのか、その証拠を人名研究が示してくれる。ロマンス諸語すべてに *Pèlerin*、*Pelegrini* もしくは *Peregrino* という名がみられる。フランスでは *Jaquet* または *Jacquot* と同様、*Romée*、*Roumée*、*Romain*、*Romany*、*Romans* が非常に多くみられ、さらに *Bourdon* や *Coquille* といったものまである。メッカから戻ったイスラム教徒はハッジと呼ばれ白い衣装を身につける。マグレブ系ユダヤ人のなかにはハッジハッジという名をもつ者さえいる。
- vii) この集会は、ガール県のミアレという場所で9月の第一日曜日に開かれている。ミアレには、1704年に殺されたカミザールの首領ロランの家に1910年に設立された荒野の博物館がある。また、タルヌ県のフェリエールにあるプロテスタント博物館のコレクションは宗教改革以降の5世紀をカバーしている。

〈Résumé〉

Les pèlerinages dans le monde, à travers le temps et l'espace

Jean Chélini

De tous ces pèlerinages divers, que nous avons étudiés à travers l'histoire et le monde, pouvons-nous dégager, dans le temps et dans l'espace, une parenté commune, des caractères convergents ? Existe-t-il, entre tous ces marcheurs de Dieu, une motivation initiale primaire qui les jette sur les routes du monde ? Est-ce le destin de l'homme d'être pèlerin ?

Au fil de l'enquête, une constatation s'est imposée à nous : le pèlerinage est une démarche universelle, présente dans toutes les civilisations. Telle est la conclusion de cette longue enquête entreprise, il y a plus de vingt ans, par Mr. Henry Branthomme, qui fut longtemps Président de l'Association des directeurs des pèlerinage en France. Nos deux premiers ouvrages sur les pèlerinages chrétiens et les pèlerinages non chrétiens avaient fait apparaître l'universalité mais aussi l'infinie variété des faits et signes du pèlerinage. En revanche, l'étude comparative que nous venons de conduire, le plus systématiquement possible, montre que d'un siècle à l'autre, d'une aire culturelle à l'autre, du monde chrétien et des religions monothéistes aux mystiques orientales, sans oublier les cultes animistes ou les religions agraires, les analogies l'emportent sur les différences. Dans la geste pèlerine, les affinité de symboles et de démarches se manifestent avec éclat.

Les coïncidences entre les aspects matériels des pèlerinages dans les diverses religions sont trop évidentes pour que nous nous y attardions. Mais nous avons observé une correspondance singulière entre les pèlerins eux-mêmes. Le pèlerinage fonctionne comme la manifestation matérielle d'un itinéraire spirituel. Intérieurement tous les pèlerins se ressemblent. Ils entament un parcours exceptionnel, qui marque une rupture avec leur vie antérieure et l'ouverture à une nouvelle vie. Le pèlerin a rendez-vous avec l'autre, qui est lumière et force. Tout le reste est secondaire. La joie au sanctuaire est à la mesure de l'effort consenti. Chaque pèlerin éprouve dans son corps et dans son cœur une exaltation sublime dont il se souviendra toute sa vie. Certains préféreraient ne pas sortir de ce bonheur intérieur et voudraient mourir sur place. Le « vrai pèlerinage » n'est-il pas l'aller, sans retour ? La mort et l'immortalité au terme du chemin ! Kairouan, Bénarés accueillent ces pèlerins ultimes. Jérusalem aussi exerce cette attirance mystique, auprès des croyants des grandes religions monothéistes qui, pour certains, rêvent d'y finir leurs jours.

Unique ou répété, le pèlerinage demeure une « quête », une marche vers le lieu marqué par la présence divine ou la trace sacrée. Le pèlerin, le *peregrinus* latin, désigne à la fois l'homme qui passe et l'étranger, tandis que l'*hadj* islamique signifie « se diriger vers » et que le *henro* japonais est « cheminement » : « aller vers ». Il n'y a pas de pèlerinage sans un sujet humain quittant son séjour habituel vers une destination sacrée. Ce mouvement de « l'aller » oppose le lieu ordinaire et profane, le domicile, et le lieu extraordinaire, sacré, le lieu saint, but du pèlerinage. La route elle-même participe plus du but que du départ, elle est spéciale, sanctifiée, ritualisée. A l'arrivée, le pèlerin use facilement du

mot qui signifie « tourner autour ». L'étonnante procession aux flambeaux de Lourdes combine les deux aspects : « aller vers » et « tourner en spirale ». Dans bien des cas, sur les lieux saints, c'est le tracé architectural qui fait se dérouler l'enveloppement : l'enceinte de Lourdes, de Saint-Pierre de Rome, de La Mecque... La « procession » s'identifie comme une sorte de pèlerinage en miniature.

Foncièrement antireligieux et athées, les régimes communistes avaient prohibé strictement les pèlerinages, au même titre que la plupart des activités spirituelles. Dans l'Union Soviétique, les déplacements étaient soumis à la présentation du passeport intérieur : les fidèles ne pouvaient donc se rendre sur les lieux anciens de pèlerinage dont beaucoup avaient été fermés ou détruits. Les croyants continuaient à vénérer chez eux en secret les saintes icônes. Mais les autorités communistes avaient dévoyé la notion de reliques et offert en substitut aux foules, le droit de venir se recueillir sur les dépouilles embaumées des héros fondateurs, Lénine ou Mao, et, à un étage inférieur, les sépultures des grandes figures du Parti. L'effondrement de l'Empire soviétique, la chute des régimes communistes ont enlevé leur légitimité à ces pseudo-sanctuaires et les formes de dévotion populaire ont repris leurs droits. En Pologne où le pouvoir n'avait jamais pu étouffer les pèlerinages, la Vierge de Jasna Gora à Czestochowa, honorée par Jean-Paul II alors que le pays était encore sous l'emprise communiste, a besoin d'attirer des foules de plus en plus nombreuses; de même dans les anciens pays communistes de tradition catholique comme la Croatie, la Slovénie, les secteurs catholiques de la Hongrie. Les pèlerinages traditionnels reprennent aussi dans les pays orthodoxes tels que la Roumanie, la Bulgarie et ... la Russie.

Le phénomène pèlerin renaît ainsi à partir de ses racines, mais il peut aussi pousser dans des terrains autres que religieux. Les chefs de la gauche française vont se recueillir annuellement devant le mur des Fédérés au Père-Lachaise, contre lequel furent fusillés les derniers combattants de la Commune en 1871. D'une façon plus nationale et citoyenne, les visites officielles et privées à l'Arc de triomphe de l'Etoile à Paris, aux monuments aux morts, aux cimetières de guerre en Europe, sont autant de pèlerinages civiques dont les participants communient dans le souvenir des héros morts et le culte de la patrie meurtrie, comme l'écrit Victor Hugo :

« Ceux qui pieusement sont morts pour la patrie, ont droit qu'à leur cercueil la foule vienne et prie. »

Le pèlerinage est universel, présent dans toutes les cultures, les plus différentes et les plus opposées. La civilisation dans laquelle il se développe lui donne ses aspects particuliers, son originalité sans pour autant en modifier le caractère humain et émotionnel. S'il n'est pas un simple phénomène de culture, c'est qu'il s'inscrit au cœur de l'homme, dans sa nature profonde. Peut-être faut-il chercher dans le génome humain le gène pèlerin? N'est-il pas plus simple de le considérer comme une manifestation spontanée et universelle de la nature humaine?